

事例：No. 1 2

現場コスト意識が工夫を生み、工夫がより良い生産性を生む！

1. 林業事業体等名称 とよた しんりんくみあい 豊田 森林 組合 (愛知県豊田市)

2. 林業事業体等の概要

- ①年間素材生産量 12,000 m³ (うち 間伐の占める割合 85%)
- ②生産する主な樹種 スギ及びヒノキ (割合は 50: 50)
- ③素材生産に関わる作業員数 11名 (1セット2～3名×4セット)

3. 取組の特長

- 1セット3名の機械作業班で、スイングヤーダ(土工併用)、プロセッサ、フォワーダにより列状間伐を中心とした低コスト木材生産を実施(H22生産実績5,600 m³ うち間伐の占める割合72%)
- ・作業工程で待ち時間等のボトルネックが生じないように、最適な人員配置や連携のとれた作業を実施。
 - ・施業予定地の調整や木材や重機輸送等の生産に付随する段取りを行う森林組合職員と現場作業班との十分な連携。

4. 具体的な内容

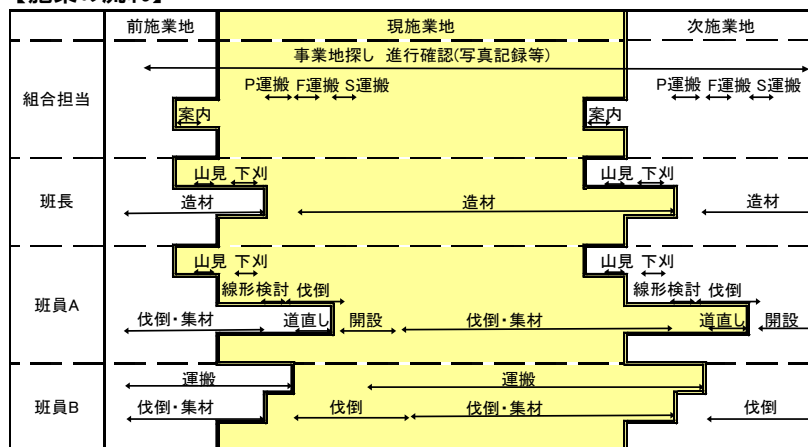
- ・森林組合職員との連携
森林組合担当者は、機械作業班に木材搬出を伴う事業地のみを割り当てるとともに、機械作業班が最適な位置に路網を入れ、伐倒後直接プロセッサ集造材する区域と、スイングヤーダによるランニングスカイライン集材する区域をうまく組合せ最大限搬出する。森林組合担当者は、施業の中頃には、次の施業予定地の地主調整等を済ませて次の場所を作業班に伝え、段取りに組み込んでもらう必要があり、連携は非常に重要である。
- ・山主への気遣い
残存列の中に著しい不良木がある場合は放置せずに伐採することにより、間伐後の印象を良好に保ち、所有者の評価は勿論のこと、列状伐採について不安を抱いている近隣の山主が見学に訪れた際に、簡易作業路と列状伐採を見て、定性間伐から、より収益の見込める機械施業の依頼へと変更した例や、施業途中で隣接する山主から依頼の声が掛る事も多い。
- ・ボトルネックの未然予防
利用間伐施業地における1ha当たりの作業日数は、平均で約5日であり、3人で効率よく作業を進めながら、後半には次の施業地の下見や、下刈り、踏査線形等の作業を連携させて効率を高める工夫をしている。

3人それぞれが役割を持ちながらも、複数の作業を受け持ち、プロセッサが最大限稼働をするよう伐採・集材し「全員で早く施業を完了させる」という意識で作業を進める。一人が休む時には、全体の進捗を考えた工程を進め、伐採や集材が終って手が空けば、次に入る施業予定地の準備を含めた段取りをする事で、より効率的な人員配置が可能となる。（さらに、途切れない歯車のようなサイクルで施業地をこなしていく事ができる。）

○労働生産性（間伐） 7.3 m³/人・日

*作業路開設と施業後の道直し含む

【施業の流れ】



※山土場からのトラック運搬は、山土場に材が溜まってしまうと、フォワーダの積み降ろし時間に影響するため、組合担当と調整を取り、滞りが発生しないようにしている。

5. 今後の取組等

それぞれがコスト意識を持ち、目標を持って作業にあたることは、作業や作業工程等に工夫が生まれ、工夫がより良い収益性、山元還元等を生む。

今後は、モチベーションを維持・向上させることと、システム等においては、県外から講師を招き、別の目線で良い点や改善点等を見出すことに取り組み、事業体の機械作業班全体への波及を目指す。



【小雨決行のプロセッサ作業】

降雨の影響を受けにくい既設作業道等の周囲は、雨天時の作業内容として段取りする。



【施業後の森林】

【報告者】

愛知県 豊田加茂農林水産事務所 森林整備課
林業普及指導員 伊藤和哉

